

子どもたちの間に立ち上がる「社会」

藤崎宏子

(大学教員)

幼稚園という「社会」

毎年、新入園児を迎える時期の幼稚園は、活気と共に喧噪に満ちています。入園式の翌日から嬉々として遊びだす子どもがいる一方で、泣き続ける、母親から離れられない子どもも少なくありません。自由に遊んでいるように見える子どもも、実は他の子どもとのかかわりはわずかなものです。多くの新入園児は、それまで家庭を中心として、父母など限られた人たちと過ごしてきたわけですから、このような姿はごく自然なものと言えるでしょう。

しかし、一か月、一学期……と園生活を重ね

る過程で、子ども同士のかかわりは確実に増えていきます。そして、例えばそこに十人の子どもがいるなら、その十人分の存在や個性を単純に足し合わせただけではない、プラスアルファの「何か」が生成されていきます。ここではそれを、「社会」という言葉で呼びたいと思います。幼稚園は、子どもたちが発達初期に出会う、初めての「社会」だと言ってよいでしょう。この「社会」の土台や枠組み、すなわち教育理念や保育体制、ルール、文化などはある程度出来上がっているとしても、そのリアリティーに富んだ内実は、子どもたちの日々の園生活の積み重ねの中で生成されていくのです。

子ども同士、そして子どもと保育者のかかわりの中で、幼稚園という「社会」はどのように立ち上がっていくのでしょうか。この小論では、社会学の草創期に活躍したドイツの社会学者、ゲオルグ・ジンメルの論考を手がかりに考えてみたいと思います。

メタファーとしての「橋」と「扉」

ジンメルは、『社会学』という大著をはじめとする多くの学術書をものにしていますが、同時に、額縁、取っ手、肖像画など、日常の風景の中に溶け込んで注目されることの少ない対象物にも鋭い観察眼を向け、軽妙洒脱なエッセーを書き残しています。「橋と扉」（一九〇九年）もその一つです。彼は、「橋」と「扉」という人間の創造物の特質を、「結合」と「分離」を鍵概念として次のように論じています。

橋は、「分離」されている川の兩岸を〈結合〉するための人間の創造物です。一方扉は、外界

から〈分離〉された小屋に取り付けることによって、内部と外界の分断を再び〈結合〉へと転換し得るものです。また、橋は、いったん架けてしまえば人が自由に行き来できるのに対し、扉の開閉は住人の意思に委ねられています。

ジンメルは、「橋」と「扉」の特徴を論じつつ、その最終的な関心は人と人の関係性に向かいます。さらにジンメルは、「社会」を人と人の行為のやりとりだと考えます。このため、人と人の関係性における〈結合〉と〈分離〉という異なる方向へのベクトルが、どのように調停しあって「社会」が成り立つのかを考え続けました。

〈結合〉と〈分離〉のアンビバランス

個々人の存在や行為、思いを足し合わせるだけでは説明がつかない「社会」とは何か――すべての社会学者が問い続け、しかしいまだコンセンサスを得た解答が与えられていない難問です。先に述べたとおり、ジンメルはこの問いに対し

て、社会とは「インタラクシオン」、すなわち、人と人の行為のやりとりだと考えました。

インタラクシオンは、人と人を結び付けます。しかし、その〈結合〉は、両者が〈分離〉しているという前提がない限りは成り立ちません。もともと一体化していると認識されているものは、〈結合〉の対象とはならないからです。同時に、人が他者を〈分離〉した存在だと見なすのは、互いの〈結合〉が意識され、希求されているがゆえなのです。

ジンメルは次のように述べています。「直接的な意味でも象徴的な意味でも、また身体的な意味でも精神的な意味でも、私たちはどの瞬間をとっても、結合したものを分離するか、あるいは分離したものを結合する存在なのだ」と。さらにジンメルは、この〈結合〉と〈分離〉は、「同じ行為の両側面にすぎない」とも述べます。〈結合〉だけ、〈分離〉だけを欲し、それを成し遂げることはできないのです。

子どもは、幼稚園で他の大勢の子どもたちと出会い、その存在を意識するものの、どのようにかかわり、どのようにつながればいいのかはわかりません。さらに、自己という存在そのものへの認識も、いまだ不十分な段階です。

しかし子どもたちは、遊びの楽しみを共有するという経験を重ねることで、他の子どもとの〈結合〉の欲求を強めていきます。当然のことながら、その過程ではしばしば争い事も生じます。しかし、ジンメルは別の著書で、「闘争」とその調停を繰り返す経験が〈結合〉をより確かなものにする다고述べています。「闘争」を通して互いに〈分離〉した存在だと認識し、それでも一緒に遊びたいという思いをもつことで、〈分離〉した他者である友達と共存するために、さまざまな方法を編み出していくのです。

子ども同士のかかわりを通して育つ自己

ある日、園の廊下で年長児一人対三人が何や

ら言い争っていました。一人の子どもが、お気に入りらしい絵本を両腕でしっかりと抱え込み、「私がこの本を読みたいんだから」と強い口調で言います。他の三人は口々に、「私たちだって読みたいから、一緒に読めばいいでしょ」と言つて、引きません。こうして平行線の言い合いが続いたのち、三人は「ほかのこととして遊ぼう」と言つて立ち去りました。残された子どもは、ひとしきり悔しそうに泣いたあと、絵本を読まないままその場に残り、駆けていきました。

残された子どもは、その絵本に対する自分の優先権を認めてくれなかった子どもたちへの怒りよりも、一人残された寂しさを、本を四人で読もうという提案を受け入れなかったことへの後悔の念を表しているように思えました。今回は扉を開けられなかったけれど、次はできるかもね——そう思えました。

扉を開いて外に出る。そこにはさまざまなお会いと経験が待っています。そうした扉の外の

経験は、扉の内にある自己を〈分離〉した存在として顧みる新たな視点を与えてくれることでしょう。扉の開閉と、それによる内外の往来は、一人ひとりの子どもたちの成長を促しつつ、子どもたちの「社会」をしだいに広げ、より確かなものにしていくのです。

ジンメルの言葉を借りるなら、「扉は「いつでも好きなきに自由な世界へとはばたいいていける」という可能性」をもちます。それでもなお、自他は〈分離〉した存在であり続けます。それゆえに人間は、「境界を知らない境界的存在」だと言えるのではないのでしょうか。

参考文献

- 1 ゲオルグ・ジンメル（一九〇九年著）「橋と扉」（北川東子編訳・鈴木直訳『ジンメル・コレクション』ちくま学芸文庫 一九九九年）
- 2 ゲオルグ・ジンメル（一九〇八年著）『社会学』上巻 居安正訳 白水社 一九九四年